
リベリオン

YUI.A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リベリオン

【Nコード】
N7250L

【作者名】
YUI・A

【あらすじ】
普通すぎて退屈な毎日
「平和」は時として人を腐らせる
そんな世界を変えたかった
しかしどうすることも出来ない
そんなとき1人の学生が動き出す

序章

高層ビルが建ち並んでいてゴミ一つないと思えるほどの街。辺りは夜中ということもあり人や車が少ない。

静寂が続いた。

次の瞬間その静寂が破られた。

街の中央付近で大きな爆発が起こった。

爆炎が上がり銃声や悲鳴が聞こえ人々が逃げ回っている。

炎の周りにはビルの3階ほどの大きさの物が数体立っていて、その炎の中から青年らしき人物が出てきた。

するとその青年を囲むように数体の物が動いた。そしてその青年を乗せてその場を離れていった。

消防の消火活動が終わり、時間が経つにつれてまた元の街へと戻っていった。

準備

太陽が照りつけ、昼になるにつれて気温が上がっていく。春から夏に変わったばかりだというのに気温は30度を超え、街行く人々は皆汗を拭っていた。

高層ビルが建ち並ぶ大通りには大型テレビでニュースが流れていた。「昨日深夜2時頃ガン又通りを走行中の護送車は何者かに襲撃される事件がありました。怪我人はおらず護送中の人物にも問題はないようです。最近こういった事件が各地で起こっています。民間人への被害はありませんが…。」

周囲の人々は大型テレビに興味を示さず通り過ぎて行く。しかし1人の学生らしき青年だけは立ち止まり真剣な表情でテレビを見ていた。

「結局…。」

小さな声で呟いた。

「レオ〜レオ〜。」

遠くから青年に向かって黒い短髪で制服姿の学生が走りながら呼んでいた。

「こんな所にいたのか。学校サボって何してんだよ。」

息を切らしたがらしゃべっている。レオは少し驚いていたがすぐに冷静な表情に戻した。

「リエカこそ何でここが…。」

「探し回っただけだよ。ってか今日何の日か覚えてるか。」

「もちろんだよ。今日はリエカの弟の誕生日だろ。今誕生日プレゼントを何にしようか考えてた所だ。」

「ありがたいけど学校まで休まなくても良かったのに…。」

「いいんだよ。そうだ、このままプレゼント選び付き合ってくれないか。」

「いいよ。ならさっさと行こうぜ。」

そう言つて2人は街へと入つていった。

大型テレビの前を通り過ぎ、ガン又通りを抜け、ウイディアという街に出た。そして目の前にあつたお店へ2人は入った。

「これなんかどうだ。」

レオはそう言つて24色入りの色鉛筆をリエカに見せた。

「絵が好きなのを覚えてくれていたんだ。きつと喜ぶよ。」

レオはその24色入り色鉛筆を買つてお店を出た。「誕生日パーティーは5時からだったよな」

レオがリエカに聞いた。「ああ。このまま直接行かないのか」

「少し用事があるんだ。5時までにはなんとか行けるようにはしてあるから心配しないでくれ。じゃあ、後で。」

「わかつたよ。後で。」

2人はそう言つて別れていった。リエカは先程通つた道へ、レオは逆へと進んだ。

誕生日

「おめでとう。」

部屋中にクラッカーの音と声が響いた。

「バタイユ誕生日おめでとう。」

バタイユ・ナーセリーは多くの学生から祝福の言葉を貰っていた。

「今日は僕の為にこのようなパーティーを開いていただきありがとうございます。」

そう言っている時入り口のドアが開いた。会場の全員が一同にドアを見た。

「レオさん」

バタイユが声を出した。レオが入って来た瞬間に起こった静寂が一瞬にして消え、また元のパーティーに戻った。レオはゆっくりとバタイユに近ずき、包装されたプレゼントを渡しながら、おめでとうと言った。

「ありがとうございます。プレゼントまで……。開けてもいいですか。」

レオが頷くと同時に包装を破いた。

「色鉛筆だ。ありがとうございますレオさん。」

「なんてかっこいい登場」

そう言いながらリエカや他の生徒が近ずいて来た。

「本だよ。バタイユ、改めて誕生日おめでとう。」

1人の女子生徒が話しかけた。

「ラウラさん。ありがとうございます。」

ラウラ・ファイサル。ここ私立ナーガルジュナ学園の生徒会長。一見おとなしそうに見えるのだが、イベントが大好きな女性。

その周りにいる生徒達もおめでとうと声をかけた。

ソニア・パブリット。

見た目通りおとなしく、普段からパソコンに向かっている。

ユリア・リンク。

とても明るく、活発な女性。誰とでも仲良くなれる。水泳部所属。

「生徒会メンバーのみなさんには本当に感謝しています。ありがとうございます。」

バタイユは、大きくお辞儀をしながら感謝した。ラウラ、ソニア、ユリア、リエカ、レオが生徒会メンバーで、年に数多くの行事を運営している。とは言っても生徒会長のラウラが発案し、詳細を考えるのはレオというのが毎回の手順になっている。つまり今回の誕生日パーティーもラウラが発案し、細かな詳細事項はレオが考えた。レオに任せることで、失敗がなく中身の濃いイベントが行われるため、こういった仕事をするのはレオになっている。

「そろそろ最後の仕上げだな。」

レオが生徒会メンバーに話した。

「まだ何かあるんですか。」

バタイユが驚いた表情で辺りを見回した。

「まだ肝心のケーキがないでしょ。」

ラウラがバタイユに話しかけた。すると会場が暗くなり、バタイユとステージがライトアップされた。

「バタイユ、ステージに行つて。」

ユリアが笑顔でバタイユを押した。

バタイユがステージに上るとライトが消えスピーカーからハッピーバースデーの歌が流れた。その曲に合わせて天井からライトに照らされた大きなケーキが下りてきた。ケーキがバタイユの目の前に来たその瞬間だった。大きな音と共に会場が揺れた。

会場にどよめきが起こった。ライトがすぐにつき全員が顔を見合わせる。

「バタイユ大丈夫か。」

リエカがすぐに駆け寄った。

「大丈夫だよ。兄さん。」

バタイユを含め会場にいた生徒に怪我はなかった。しかしすぐさま

大きな音と揺れが来た。何人かの男子生徒は気になり外を見に行った。

「なんだこれ。」

男子生徒の1人が言った。その声を聞き、レオがすぐに外を見た。

「これは……」

言葉では驚いているが、表情はどこか笑っていた。

「どうしたの。」

ラウラを含め多くの生徒が外を見に来た。

「見れば分かりますよ。会長、家が心配なので帰らせてもらっても良いでしょうか。」

ラウラは慌てて外を見た。そこには今まで見たことのない景色が広がっていた。今までゴミ1つないほど綺麗な街で多くの高層ビルが建ち並んでいたが、目の前には灰色の煙が上がり空が濁り、倒壊したビルが山のようにあった。

ラウラは言葉が出なかった。それを見たレオは静かにゆっくりと会場を後にした。

ほんの数秒時間を必要としたがラウラはすぐに我に返った。そして冷静に話した。

「みんな、学校から出ては駄目よ。それこそ危ないんだから。早く中に入って。」

それを聞き全員が部屋の中に入った。先程出て行った、レオを除いては。

リエカは会場にあるテレビを点けた。テレビではニュースが流れていた。

「怪我人が多数出ている模様です。原因は今だ不明ですが何者かがウィディア市街に爆弾を設置し、それを爆発させたとみて警備隊が捜査をしています。引き続き新しい情報が入り次第連絡します。今日は爆弾に詳しい専門家……」

「なんで急にこんなこと。」

リエカが呟きながら周りを見ると生徒全員が不安な顔をしていた。

そんな中、ユリアだけは辺りを見渡していた。

「ユリア、どうしたんだ。」

「あつリエカ。レオの姿が見えなくて。」

「確かに。もしかしてあいつ街に。」

2人は顔を見合わせながら慌てて部屋を出ようとした。しかし、ラウラに止められてしまった。

「あなた達まで行つては駄目。大丈夫レオなら…。」

3人は暗い顔をしながら元の位置に戻った。

「ハハハハハハ。」

レオは笑っていた。

「こんなにも簡単に壊すことが…。オレには出来る。不可能な事などない。」

爆炎が上がる中、レオは独り言をこぼしながらゆっくりと歩いていた。すると遠くから警備隊員が2人やって来た。

「学生、大丈夫か。今から君を安全な場所に移す。付いてきなさい。」

警備隊員の1人がレオの腕を掴んだ。

「触るな。」

レオが腕を払いのけた。

「なんだと貴様。もう一度言う、私達と一緒に来るんだ。」

警備隊員がレオに言う。「断る。」

レオがそう言うのと警備隊員は、銃を構えた。

「貴様、ミューティニアか」

もう1人の警備隊員も銃を構えた。レオは銃を向けられているにも関わらず冷静な表情で2人を見ていた。

「ミューティニアだったらどうする。オレを殺すか。最もお前には出来ないだろうがな。オレを撃とうとした時お前は死ぬんだから。」

警備隊員の1人が怒りながら銃でレオを撃とうとした時銃声が聞こえ、レオを撃とうとした警備隊員が倒れた。すると、もう1人の警備隊員が銃の引き金を引いていた。その時レオは何かを考えながら聞こえない程の声で呟いているように見えた。そして、もう1人の警備隊員は、銃の向きを自らの喉に向け、また引き金を引いた。レオの前には大量の血と死体が2つ転がっている。レオはそれを見向きもしないで、通り過ぎていった。

「オレは、この腐りきった世界を壊してやる。誰もオレを止められない。なぜならオレはレオ・ド・ウイグナー。全てを手に入れる男だ。」

制圧作戦

豪勢な建物が並び、行き交う人々は皆貴族のような服装である。街の中心には、ひととき目立つ大きな宮殿が建っていた。

―エルサレム宮殿―

世界3大国に入るウィンデスクの首都エルサレムにある世界1大きな宮殿である。

エルサレム宮殿には、国王リウィウス・オクタビアヌスなどの王族家や国王親衛隊コホルスが主に住んでいる。

普段は高級車や馬車など様々な乗り物が街を走っている。しかし今日は騒々しく戦車や大型トラックが走っていた。街の人々はその理由を知っているらしく驚いていなかった、むしろ歓声を上げ応援をしていた。そしてその戦車や大型トラックが向かっている場所はエルサレム宮殿であった。

「国王様、例の物は直に到着とのことです。コホルスも準備が整っております。」

兵士らしき人物が話しかけた。国王の前には、レースのようなものが掛かっていて顔は見えないが威圧感は激しいものだった。国王は兵士に、わかったとだけ告げた。兵士が去り部屋に国王1人となると、椅子から立ち上がり窓から外を見下ろした。長い銀髪、青い瞳、すこし顎髭が伸びている。表情はとても険しかった。

ドアの叩かれる音がして、マントを羽織り、長髪で左目が髪で隠され、どこか楽しい表情の兵士が部屋に入ってきた。先程の兵士と比べ明らかに違う雰囲気だった。

―カエサル・ミュラント―

国王親衛隊コホルス隊長。頭脳明晰、実力・経験共に充分。国王が最も信頼できる兵士。

「国王様、準備が整いました。あとは出撃の御命令を待つのみです。」
「カエサルが国王に話しかけ、少しの静寂が続く、国王が一言話した。」

「私も出陣する。」

あまりの唐突さに一瞬カエサルは驚いた表情を見せた。

「国王、それではあなたの命が……。」

カエサルは言葉を続けようとしたが国王がそれを遮り話し出した。
「カエサル、命とはなんだ。奪うためにあるのか、ただ何もせずに生きていることか、どちらも違う。人々が必死に生きていくためにあるんだよ。だが私は今それを破ろうとしている。娘のためだからといって簡単に破って良いことだとは思わない。だから私自身がそれ相応の何かをしなければならぬ。命をかけなければならぬ。そうだとカエサル。」
国王はカエサルに聞いた。カエサルは表情を変えずに答えた。

「わかりました。ただし国王が何と言おうとも、私達コホルスは国王を命に代えてもお守りすることだけは変わりません。」
国王はカエサルに行こうと言い、部屋を出て行った。

「会長まだあるんですか。」

「リエカはほとんど何にもしてないじゃない。もつと働きなさい。」
生徒会室でラウラとリエカは生徒会の仕事をしながら話していた。机には書類が山のように積まれていて、1日では終わりそうもない量だった。奥ではソニアが1人でパソコンに向かっていて。すると生徒会室の扉が開きユリアが入ってきた。「遅くなってごめんね。部活、長引いちゃった。あれ、レオは来てないんだ。」
ユリアが心配そうにラウラ達に聞いた。

「そうなのよね。最近学校も休み気味だし、学校に来てもすぐに帰

「つちゃうし、生徒会の仕事も溜まって来ちゃって私達が大変だし、何かあったのかしら。リエカは何か知らないの。」

「リエカは特に表情を変えずに答えた。」

「僕だつてわからないですよ。弟の誕生日あたりからあいつ何か変なんだよ。隠してるっていうか、みんなから遠ざかっていくっていうか、そんな感じなんだよ。」

「リエカがそう言うのと全員の顔が暗くなった。」

「それなら私達が話し掛けてあげなきゃダメなんじゃない。」

「ラウラが笑顔で言い、そして思いついたように言った。」

「そうだ、レオが今度来た時にパーティーをしよう。名前はそうだな…。」

「ラウラは少し考えてから言った。」

「夏祭り頑張りましょうパーティーなんてどう。」

「それを聞いてユリアはきよとした。」

「なんですか、会長。」

「だからね、もうじき夏でしょ。夏といえば夏祭り、つまり私達の大仕事。だから、大変だけど頑張ろうっていうパーティーよ。」

「それは無理矢理すぎませんか。」

「ソニアが聞いた。」

「ソニアも聞いてたの。てっきりパソコンに夢中かと…。」

「ラウラは驚いた表情を見せたがまたすぐに話し出した。」

「見なさい、この空を。」

「そう言つて空に指を指した。」

「照りつける太陽、蝉の鳴き声、どう考えても夏でしょ。」

「ラウラは賛同を求めたが、すぐに表情を変え続けた。」

「まあ正直そんな事はどうでもいいのよね。レオがいつものレオに戻ってくれば。」

「ラウラの表情が少し暗くなった。リエカもラウラ同様表情が暗くなった。」

「会長、あれ。」

生徒会室に重く、暗い空気が流れていた時、ユリアが突如外に向かって指を指した。全員が一同に外を見た。

「何も見えないけど、どうしたの。」

ラウラがユリアに聞き返した。

「あそこですよ。何かがこつち向かってきてるじゃないですか。」

ラウラはもう一度外を見た。

「ユリアの目が良すぎるのよ。私には何も…」

”見えない”と言おうとした時、ラウラは多くの何かが飛んでくるのが見えた。

「何あれ。」

リエカとソニアも気づいたらしく声を漏らした。

「このプリウス・ピルスに乗るのは気持ちが良い。新たに改造され素晴らしい物になった。」

カエサルはコックピットに乗っていた。手を伸ばせば届く程の天井、目の前には大画面があり、手元には操作バーが2本、座席の横にはボタンが多くある。

戦闘兵器センチリオン（CENTURION）

大きさはビルの上3階程で人型のロボットである。センチリオンはフォークウイングという飛行システムを装備しているため、空を飛ぶことが出来る。カエサルの場合はコホルス隊長のため、プリウス・ピルスという専用機を持っている。同じようにコホルスの中でも選りすぐりのメンバーだけは専用機を持つことが出来る。

カエサルは先頭で飛行しており、その後ろにコホルス選りすぐりのメンバーが乗る専用機や一般的な機体など様々なセンチリオンが続いていた。

国王は安全確保のため最も後方の飛行船艦に乗り込んでいる。

「国王様、目的地が見えました。あと5分で到着いたします。」

船艦の中の兵士が国王に伝えた。

それを聞き国王は立ち上がった。

「全兵士に告ぐ。ウィンデスク国に到着後総攻撃を仕掛ける。指揮はカエサルが行う。なんとしても娘を助けてくれ。」

国王がそう告げると無線から了解という声が聞こえてきた。

カエサルはコックピットで国王の声を聞いた後、コホルスメンバーに無線で伝えた。

「1番隊は私と共に空中正面から直接ウィディアに、2番隊は空中左手からウィディアに進行、3番隊は空中右手からウィディアに進行、4番隊、5番隊はウィンデスク国に到着次第地上に降り制圧しつつウィディアに進行、ウィディアに到着後地上に降り、総攻撃。ただし王女カナン様がおられるとされる中央のウィディア宮殿には一切のダメージを与えるな。国王のためにも何としても遂行せよ以上。」

カエサルがとても強い口調で話した。国王への忠誠心がどれほど強いものなのかが伝わるそんな言葉だった。

飛んでくる何かがセンチリオンだと確信したのはセンチリオンがウィディアに入る寸前だった。その数分前から爆発が起こっていたため想像はついていた。ナーガルジュナ学園に部活などで残っていた生徒はみな体育館に集まり静かに爆発が治まるのを待っていた。爆発が起こった時、ラウラ達生徒会メンバーが外へ生徒を出させないために集合させたのだ。体育館だから安全という訳ではないが、外に出るよりは安全だという判断だった。

「レオは大丈夫かな。」

ラウラが心配そうに呟いた。

「大丈夫ですよ会長。弟のパーティーの時だって何事もなかったかのように帰ってきたじゃないですか。」

リエカは少し笑顔で話していた。

バタイユの誕生日パーティー翌日、レオはいつものようにクールな表情で登校してきた。生徒会メンバーを含め、多くの生徒がレオの事を心配したが怪我もなくいつもと変わらない様子だった。

その時の事を考え、リエカはラウラに言ったのだった。

ラウラは心配そうな顔はしているが、今やるべき事と言って、動き出した。

カエサル達1番隊はウィディアに入り総攻撃を仕掛けていた。プリウス・ピルスは左手に持っている銃で目の前にいる戦車や警備隊をうちながら進んでいた。

「この手薄さは何だ。」

カエサルは呟きながらも凄スピードで進んでいた。コホルスはウィンデスク国を徐々に制圧しながらあつという間に宮殿まであと数キロメートルというところまで来ていた。

「カエサル隊長、こちら2番隊隊長アルト。」

カエサルの無線が響いた。

「どうした。」

「相手から奇妙な攻撃が。詳細は不明ですが、何機かやられました。そちらにも攻撃があるかもしれません。注意してください。」

「わかった。何かあったらまた報告をしてくれ。」

「了解。」

カエサルは奇妙な攻撃とはいったい何なのか考えていた。するとまた無線が鳴った。

「こちら3番隊長サラデイン。」

「どうした。」

「何機か破壊されました。しかしパイロットに聞いてもなぜ破壊されたのか不明だと。…また1機やられたと報告がありました。これも理由がわからないそうです。謎な攻撃のためお気をつけください。」

「わかった。何かわかれば報告をしてくれ。」

「了解。」

カエサルはまた考えていた。しかし考えるほど謎は増えていた。宮殿目前まで来たときだった。

カエサルの目の前には倒れている多くの人々、破損したセンチリオンや戦車など多くのものがあつた。

「これはいつたい。」

カエサルは啞然し、その場に止まった。しかし数秒後また動き出しその横を通り過ぎようとした。しかしその瞬間プリウス・ピルスが勝手に動き出した。カエサルはどうなっているのかまったくわからなかった。

「くそ。」

カエサルはそう吐き捨てた。

運命 と 始まり

ふと目が覚めると、レオは、病室のベットのの上にいた。辺りを見渡したが人の気配はなかった。

レオは立ち上がりカーテンと窓を開けた。すると目の前には悲惨な光景が広がっていた。

様々な場所で黒煙が上がり、建物は崩壊し、レオが分かる範囲内だけでも数え切れないほどの死体があった。

レオは自分がなぜここにいるのかを考えようとしたが頭痛が起こり思い出せなかった。

レオは外に出ようと、病室の扉を開け廊下に出た。病院は、外が悲惨な状況になっているにも関わらずイヤな程静かだった。

レオが廊下を歩いていると、医者と看護婦が後ろから走ってきた。レオは端により医者と看護婦を通そうとすると、前から救護係らしき2人が怪我人を乗せた担架を持って走ってきた。

医者は急いでその2人に怪我人の状況を聞いていた。

「様態は。」

「制服を着ているため学生と思われます。銃により腹部を2力所撃たれています。気を失っており、出血が多く、一刻も早く治療をお願いします。」

そう話しながらレオの前を通り過ぎようとしていた。

レオは担架に乗っている怪我人を見ていて、どこかで見たことがあるような気がしていた。少しの間考えたあとすぐに思い出した。しかし思い出すよりも早く体は動いていた。

「サムナ。」

レオは担架に乗っている人物の名前を呼びながら駆け寄った。

医者は驚きながら知り合いなのかと訪ねてきたが、レオは迷わずに友達ですと答えた。

「お願いします。サムナを助けて下さい。」
レオは顔だけ医者に向けて叫んでいた。後で言えば、取り乱し過ぎたに違いない。しかし今はサムナのことと頭がいっぱいだった。
医者達は、レオを担架から離し治療室に入っていた。レオも一緒に入ろうとしていたが看護婦に止められた。レオはその場に立ち尽くしていた。

- 10年前 レオ8歳 -

森に緑が生い茂り、虫の鳴き声が聞こえ、海岸には大勢の人で賑わいを見せていた。

ウィンデスク国最北端の街ウィザー。

「レオ。外に遊びに行かないの。」

「母さんはいつもそれしか言わない。僕は外には行かない。」

「そう、残念ね。」

キーラ・ラブ・ウィグナー

レオの母親。

レオは小さい頃体があまり強くないため運動などはあまりしなく、学校に行かず、外に出ることも少なかった。

今日もキーラは、レオに元気に強くなってもらうため外に出ないかと声を掛けていた。しかし結果はいつもと同じだった。

レオの家は豪勢な住宅街が並ぶその中の1軒で、2階建ての高価そうな家だった。

ある日、キーラがいつものように声を掛けると、レオは部屋から出てきて外に行つてくると言い、家を出て行った。

以前キーラに散歩をするだけでも良い運動になると言われたのを思い出し、嫌ではあったが気分転換を兼ね家の周りを散歩することにした。

長時間歩いた訳ではないが、レオには十分な運動になり、気分転換になった。

少し汗をかきながらレオが家に戻ると、とても静かだった。

「ただいま。」

レオが声を掛けるが反応がなかった。家の中を全て探したがキーラの姿がなかった。荒らされた様子はなく、レオが家を出たときと同じ状態だった。嫌な予感がしなくもなかったが、キーラが出かけることはよくあったのでレオは家でキーラが帰るのを待つことにした。

5日後

この日もキーラは帰って来なかった。レオは家にある食料を適当に食べて過ごしていた。そんな時、家の扉を叩く音がした。レオは慌てて立ち上がり玄関まで走って向かった。しかしそこに現れたのは長身のスーツを着た男だった。

「初めまして。ロック家執事のサン・アンデルセンと申します。」

そう言つて頭を下げた。そして続けた。

「今日はレオ様をお迎えに参りました。どうぞお車の方へお乗り下さい。」

レオは訳が分からずただ立っていた。

レオが覚えているのはロック家の家に着いた頃。とても大きな門が

あり、そこを通ると巨大な屋敷が見えてくる。

レオは車から降り、屋敷へ向かって歩いていった。

屋敷の扉が開き中から女性が1人出て来た。

レオは一瞬自分の母親かと思ったが、全く似ていなかった。

その女性はドレスを着ていて綺麗な人だった。そして優しい口調でレオに話し掛けた。

「いらつしゃい。私の名前はジュリア・ロック。今日からあなたの母親代わりになるからね。」

レオに聞こえてはいたが全く反応を示さなかった。

屋敷の中に入ると執事に自分の部屋、風呂、お手洗いなど屋敷の話しを聞き、夕飯の時、レオが自己紹介をして、家の人達を紹介してもらった。

そしてそこで初めてサムナ・ロックとレオは出会った。

- -

「レオ、俺たちがまた会った時、それは運命だ。その時…。」

レオは治療室の前で考えごとをしながら祈っていた。

サムナが治療室に入ってから1時間が経過していた。看護婦が何度もレオの前を行き来していたためレオは様態がかなり悪かったのだと思っていた。

ただ祈ることしか出来なかった。

それからまた1時間が経った。

治療室の扉が開き医者が出て来た。レオがそれに気づくと、急いで駆け寄った。

「サムナわ。」

医者は安堵の表情で大丈夫ですよと言った。

レオの病室に丁度空気があったため、サムナと同じ病室になった。

レオは麻酔で眠っているサムナを見ながら良かったと何度も呟いた。麻酔は切れているはずだったが1日中サムナは目を覚まさなかった。次の日の朝レオが目を覚まし、サムナの様子を見るとまだ眠っていた。しかし、すぐに目を覚ました。

「サムナ大丈夫が。」

それに気付いたレオはすぐに声をかけた。サムナは状況を全く理解出来ておらず、少し混乱していた。

「君は…。」

サムナはまだ焦点があっていないのか視界がぼやけていた。

徐々に視界が戻ってくると表情がはつきりしてきた。そしてレオの顔を少し眺めた。

「もしかしてレオか。」

サムナは完全に思い出した。

「そうだよ。レオだ。」

レオはとても嬉しそうだった。

「久しぶりだな。6年ぶりか。こんなところで会うなんてな。」

「それはこっちのセリフだ。急にお前が運ばれてきて、出血がすごかったんだからな。」

「心配を掛けてすまなかった。」

2人は笑いながら話していた。

話している間に時間があつという間に過ぎ昼間になっていた。話の内容は深い物へとなっていた。

「レオ、お前の母さんのことだけど。」

レオは一瞬動きが止まったように感じた。しかしその後少し考えてから話し出した。

「サムナあの時の約束覚えてるか。オレ達が別れる時にした約束。」
サムナは迷わずに答えた。

「ああ。オレ達がまた会ったとき、それは運命だ。その時世界が今と何も変わっていないければオレ達で変えて見せよう。だろ。」

レオは黙って頷いた。そして、互いの表情が明らかに変わったのがわかった。

今日が運命の日であり始まりの日であった。

「サムナ、オレはお前に言っておかなければならないことがある。」
サムナは若干驚いた表情を見せ、何だと聞いた。

「それは誰も知らないオレの力のことと今ウィディアで何が起っているかだ…。」

嘘と真実（前書き）

前回までのあらすじ

ウィンデスク国に住む学生レオは不思議な力を持っていた。
レオはその力で世界を変えることを決意する。

パルティア国親衛隊コホルス、隊長力エサルはウィンデスク国に連れ去られた国王の娘を救出するため出撃する。しかし奇妙な攻撃により苦戦する。

コホルス出撃から数日後病院にいたレオは古い友人サムナに会う。
そして昔の約束を果たそうと手を取り合った。

嘘と真実

・サムナが病院に運ばれてくる2日前・

「くそつ。なぜ勝手に動いているんだ。」

カエサル・ミュラントは必死にバー（センチュリオンを操縦するためのバー）を動かすが、プリウス・ピルスは全く思い通りに動こうとしなかった。

プリウス・ピルスの無線は何とか繋がるためカエサルは2番隊隊長アルト・ベハイムに通信した。

「アルト。聞こえるか。今どこにいる。」

無線からまだ若い男の声が聞こえてきた。

「はい、聞こえています。あと数分で宮殿正面に着きます。ただ2番隊の何機かは既に到着しているはずなのですが通信が途絶えました。」

カエサルはその言葉を聞き、周りにあるセンチュリオンを見た。それは確かにコホルスのセンチュリオンであった。

「作戦を変更する。2、3番隊は正面に回らずそのまま宮殿の左右を包囲してくれ。ただし宮殿から2キロ程離れている。それと、サラディンにも伝えておいてくれ。以上。」

「な…了解。」

アルトは一瞬急な作戦変更について聞こうとしたが、すぐに自分がやるべきことに戻った。

カエサルが急な作戦変更をしたのも他の部隊までも今の自分の用にしないためである。

無線が切れるとカエサルは眉間にしわを寄せながら考えていた。何度もプリウス・ピルスを動かそうとするが全く動く気配がなかった。

「下りるしかないか…。」

カエサルはそう呟きながらコックピットのハッチを開けた。太陽がカエサルを照りつけ辺りはコックピットから見るよりも悲惨な状況だった。カエサルは地面に下り、辺りを見渡した。特に異常な状態はないはずだったがプリウス・ピルスはまたも勝手に動き出した。

カエサルは苦い表情を見せたが、すぐさま周辺を調査し始めた。しかし、一向に異常になった手掛かりが見つからなかった。

「なぜこんな事が。」

カエサルはふと呟いた。

一瞬の静寂があった。しかし、その後どこからか声が聞こえた。

「それを知りたいか。」

青年のようなまだ若い声だった。

「誰だ。」

カエサルはすぐに叫んだ。

するとカエサルが立っている横の高層ビルから一人の青年が歩いて来た。

「学生…。」

カエサルは一瞬呟いたがすぐ青年に向かって叫んだ。

「お前は誰だ。いったい何を知っている。」

青年は黙ったまま近づいてくる。

カエサルは腰にある銃を青年に向けて構えた。その時やっと青年は歩みを止めた。そして話し出した。

「まず、オレの質問に答えてもらいたい。」

「その質問に答えたら今何が起きているのか教えてくれると…。」
青年が何を知っていると言うんだ。」

「では、これだろうか。」

青年が言うと、プリウス・ピルスが奇妙に動き出した。

「そのセンチュリオンが空に向かって銃を撃つ。」

青年がカエサルに向かって話した。するとプリウス・ピルスが、持

っている銃を空に向け発砲した。

カエサルは驚いて青年に叫んだ。

「何をした。」

青年は表情を変えず冷静に問いかけた。

「オレの質問に答える気になったか。」

カエサルは悔しい表情をしていた。そして、質問に答えることにした。

まず名前と身分を話した。

「お前達はどこから来た。」

「パルティア国だ。」

それを聞いた青年の表情が少し硬直した。

「パルティア国だと……。たしか国王の名前はリウィウス・オクタビアヌス。なぜパルティア国がここ、ウィンデスク国を攻撃している。両国での話し合いで共に協力していこうとなつたのではなかったのか。」

それを聞いたカエサルは怒りの表情だった。

「ウィンデスクがパルティアと手を組んだ。そんな話あるはずがない。もしそれが本当だとしたら我々はやはり裏切られたということになる。」

「手を組んでいないのか。」

青年は「やはり」という言葉が引つかかったがあえて追及せずにパルティア国がウィンデスク国を攻めた理由を聞いた。

「リウィウス・オクタビアヌス国王の娘、カナン・オクタビアヌス様がウィンデスクに人質として連れ去られている。だからカナン様を助けるために我々はウィンデスクを制圧しようとしている。」

「何だと。それは本当なのか。」

青年はそのことを知らなかった様子だった。

「国の民がそのことを知らないのか。」

「そんな話は一度も聞いたことがない。むしろパルティアとはうまくやっていると思っていた。」

青年がそう言うと、カエサルは怒りが露わになっていった。

「国民にも嘘を……。この国は」

カエサルが喋ろうとしていたが青年がカエサルの言葉を掻き消すように叫んだ。

『腐ってる』

カエサルはすぐに青年に聞いた。

「君はこの国を恨んでいるのか。」

「今まではこの国以外を恨んでいた。しかし今はこの世界を恨んでいる。」

「君の質問には答えた。次は君が答える番だ。」

カエサルは青年との会話で大分熱くなっていた。

「最後に一つ聞いていいか。」青年が言った。

「なんだ。」

「オレと一緒に戦わないか。」

青年の急な質問にカエサルの動きは止まってしまった。

「なんの冗談だ。俺とお前は敵だぞ。」

「国とは人だとオレは思う。しかしこの国は人に嘘をついた。嘘をつかなければならない理由があった。つまりこの国で何かが起こっている可能性がある。」

話の途中でカエサルが口を開いた。

「しかしそれと俺達と手を組むことになんの関係がある。」

青年は話し出した。

「だからといって簡単に国の裏側を知ることとは出来ない。しかし一つだけ分かっていることがある。」

「それは何だ。」カエサルが聞いてくる。

「この国が腐っているということだ。お前達もパルティア国に疑問を持っているんだろ。国王に裏切られているのではないかと……。」

青年はここで気になっていたことに少し触れながら話した。

それを聞いたカエサルは微笑を浮かべ、青年に向かって話した。

「俺達と手を組んだら、もう後戻りは出来ないぞ。」

「すでに一步は踏み出している。オレは眞実を知りたい。今更後戻りなんて……。」

青年は答えた。

カエサルは右手を青年に伸ばした。それを見た青年も手を伸ばした。

「まだ君の名前を聞いていなかった。」

「オレはレオ。レオ・ド・ウイグナー。」

二人は強く握手を交わした。

操作のリベル（前書き）

カエサルと手を組んだレオ。

レオは何故病院に…。

カエサルとレオは何をする…。

そしてついにレオの能力が…。

操作のリベル

病院の中はとても静かだった。

そのため廊下で話をしていれば自然と他者の耳に入ってしまう。それを避けるためレオとサムナは悲惨な姿をしたウィンデスクの街並みの見える屋上に移動していた。

「レオとコホルスで手を組んだのか。これで一つ納得した。なぜ今攻撃がないのか。それはお前が病院に運ばれたから。そうだろ。」
サムナはレオに聞いた。

「そうだ。」

レオは当然のような顔で答えた。しかしサムナはここでまた一つ疑問が生まれた。

「だが何故お前が病院に運ばれる状況になった。既にコホルスとは手を組んだ。つまりお前自身には攻撃がないはずだろ。一体誰が。」
最もな質問だ。コホルス隊長カエサルとレオは手を組んだ。その時点でカエサルから危害は及ばない。では他のコホルス隊員はどうだろうか。しかしそれも有り得ない。

なぜならカエサルがレオに会う前、無線で指示を出し、宮殿正面に回らない布陣を全隊員に通達している。

サムナの質問を聞いたレオは話し出した。

「慌てるな。順を追って話そう。」

レオはそう言ってまた話し出した。

「では君について話してもらおうかな。今度は君が答える番だ。」

カエサルはそう言いながらレオと握手していた手を放した。

「ええ。お話しましょう。」

レオは冷静に答えた。

「まず君の訳の分からない力について話してもらおうかな。」レオは一旦深呼吸をしてから話し出した。

「これから言うことはオレ達二人だけの秘密にしてもらいたい。他の隊員には言わないでほしい。」

カエサルは迷わずに答えた。

「わかった。約束しよう。」

そしてレオは自分の持つている力について話し出した。

「『リベル』という力がある。オレはそれの中の『操作のリベル』という力を持っている。操作のリベルはある条件を満たせば、人や機械など全てを操ることが出来る。だからカエサルのセンチュリオンも勝手に動き出した。」

カエサルは驚いていた。この世界にそんな隠された力があることを知らなかったからである。

「その条件とは何なんだ。」

カエサルは驚きを隠せないままレオに質問した。

「条件は三つある。」

一・操る対象を実際に自らの目で確認する

二・リベルをかけるとき対象を見ながら『リベル』と言う

三・人を操作する場合は一言でも会話をする

この三つが条件だ。」

「つまり今の私ならそのリベルというやつにかかるわけだ。」

カエサルは驚きがなくなり、真剣な表情だった。

「一応そうなる。まあ、かけないがな。」

レオは不意を突かれたような表情で答えた。

「リベルにかかった奴はどうなる。」

カエサルは間を空けずに質問してきた。

「オレが対象に向かつてリベル解除と言えば元に戻る。言わなければどれだけかかっているのかオレには分からない。」

一度かかれれば何処にいてもかけることが出来る。ただし解除してしまつた場合は、もう一度かけることは出来ない。

操作されている時以外は普段の状態、つまり日常生活を普通に送ることが出来るが操作されている時の記憶はなくなっている。オレの力で分かっている事はこの位だ。」

レオはそう言つて一旦話を終わらした。

カエサルは目の前でリベルを見てしまつた以上認めるしかなく特に疑問は持たなかった。

静寂が流れた後、レオの後ろからプリウス・ピルスが戻ってきた。

「リベル解除」

レオが小さな声で言つた。するとプリウス・ピルスは完全停止した。カエサルは愛機プリウス・ピルスが元に戻り安堵していた。

「では次の話に入ろう。」

それを聞いたレオはすぐに口を開いた。

「これからどうするかだろ。」

「ああ。そうだ。」

カエサルもすぐに答えた。

だが二人の中でその答えは出ていた。それはカナン・オクタビアヌスの救出とウィンデスクとパーティアの裏の関係を暴くこと。

ウィンデスクとパーティアが手を組んでいた場合、何故カナン・オクタビアヌスを人質として捕らえる必要があつたのか。

手を組んでいなかった場合何故国民に嘘をつく必要があつたのか。

前者、後者どちらにせよレオとコホルスが手を組むことは変わらないが目的意識に違いが出てきてしまう。

それを防ぐ為にも真実を知る必要があるのだ。

「作戦を考えよう。」

カエサルが考えながらレオに話した。
しかしレオは返事をしなかった。

「レオ聞いているのか。」

カエサルからの二度目の呼びかけでレオは気付いた。

「どうしたカエサル。」

レオは全くカエサルの話を聞いていなかった。

「どうしたんだレオ。」

カエサルがまた質問をするとレオはまたも何も聞いていなかった。

「まあいい。作戦を考えよう。」

カエサルはこのレオを見て気にせず作戦を考え出すことにした。しかし考えようとした時唐突にレオが話し出した。

「作戦なら考えた。」

カエサルはまたも驚き、先程カエサルの話を聞いていなかったことにも納得がいった。

「どんな作戦だ。聞かせてくれ。」

カエサルは興味深く聞いた。

「その作戦で行こう。」

カエサルは作戦内容を聞くとすぐに頷き、これなら行けると思った。それと同時にレオは天才だとも思った。

「この短時間であれほどの作戦を……。」

カエサルはそつと呟いた。

「早速始めよう。」

レオはそう言っただけで始めにレオが姿を表したビルの中に入っていた。

カエサルはプリウス・ピルスに乗り込みレオからの通信を待った。

数分が過ぎた。

「カエサル聞こえるか。」

無線からレオの声が聞こえてきた。

「聞こえている。」

カエサルが答えた。

「よし。ではこれから作戦を始める。オレが常に指示を出す。指示通り頼む。んっあれは……」

レオが話している途中だった。プリウス・ピルスの横にあったビルが爆発音と共に崩れていった。しかもそのビルはレオが入っているビルであった。

カエサルはすかさずレオに無線で連絡した。

「どうしたんだ。レオ大丈夫か。」

カエサルは何度も叫び続けた。

数十秒後無線から声が聞こえた。

「カエサル一旦撤退するんだ。」

カエサルは理解していなかった。

「どういうことだ。」

「オレがいたビルは宮殿からの発砲により攻撃を受けた。そしてオレは宮殿の中で捕まっているカナン・オクタビアヌスを見た。これである程度は分かった。撤退の最もな理由はコホルスの攻撃が分かっていたかのように既に防御態勢が整っているからだ。」

それを聞いたカエサルはすぐに撤退命令を出した。

「一時撤退する。我々の攻撃が読まれていた。作戦を立て直す。」

カエサルは深呼吸をしてからレオに話しかけた。

「レオ。君がいてくれて助かった。これからどのようにして君をコホルスに紹介しよう。」

無線からレオの笑った声が聞こえた。

「まだ早いですよ。紹介はこの戦いが終わってからにしましょう。」

まずオレはこのビルから…」

その瞬間またも爆発音がした。そしてレオが中に入っているビルに直撃し完全に崩壊した。

「レオーー！」

カエサルは無線に向かって叫んだ。

「それでここに来たわけか。」

サムナは安心しながらレオに話した。

「これがオレの事と今ここで起こっていることだ。」

辺りは既に暗くなり始めていた。

風が少し強くなり、焦げ臭い匂いが充満している。

レオとサムナは病室に戻った。

「この国を世界を変えなければいけないな。」

サムナは呟いた。

「レオ。すぐにでも退院しよう。オレ達の夢の為に。」

サムナは何か嬉しそうだった。

「そうだな。その為にまずこの国から始めようか。」 『夢を現実に
変えるその日まで神は我らに味方する』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7250/>

リベリオン

2011年10月7日06時37分発行